悲喜交々の
アンソロジー
南海部覚悟

目次

ジョン・カイリング・クアリ 1
黒木玲子と穴見愁子 3
奥寺　淳 5
白河笑子 7
秋山修平 9

ジョン・カイリング・クアリ

芦屋市六麓荘町、日本を代表する高級住宅街である。

夜陰の要所々に、ぼんやりと瀟洒な常夜灯が点在する。
整然と並ぶ敷地の一区画、建物の外壁と一体となったコンクリートの長い塀の上を、黒い影がひとつ走り抜ける。
長い腕と長い脚、ゆったりとした身のこなしが宛ら蜘蛛のようだ。
中庭と屋根が混在する、広大なコートハウスの小さな屋根スラブに降り立った。
隅にあるトップライトに近寄る。
大抵の場合、住宅への侵入は窓のガラス破りが一番簡単で楽だと考えるものだが、サッシそのものを枠をも含めて建物から外す方が、補助錠も防犯フィルムも気にならないから遥かに確実だ。
但しそれは、サッシ枠が屋外側から付いている木造住宅に限ったことで、この住宅のような鉄筋コンクリートのサッシ枠は、室内側から建物に溶接されている。
唯一屋根の上のトップライト（天窓）だけが、外部からボルトで取り付けられているのだ。

ワイヤーロープを使って降りた床がタイル貼りの浴室だった。
周囲に気を配りながら、長い廊下に出る。
所々にあるコンセントに特殊なプラグを挿しスイッチを入れる、赤外線と超音波の発信機だ。
オンラインのセキュリティー設備には、3 か月も前から侵入して、何度も警報を上げさせているから、住人は誤報にうんざりしている筈だ。
既にメインの電源を落としていると思う。
但し、スタンドアロンの掃除ロボットが巡回していて警報を上げる可能性もある。
発信機は彼らのセンサーにホワイトアウトの環境を提供する。
廊下の両側にドアが並ぶ、この家に複数ある寝室のドアだ。
寝室のドレッサーには、宝石を散りばめた贅沢なアクセサリー、クローゼットの引き出しには、相応のタンス預金も有るかも知れない、しかしそれ等には目もくれない。
金銀プラチナ等の貴金属は、近年の安定核核分裂・常温核融合技術の進展に伴う元素合成により、大量生産が可能になった。

宝石も、今や天然物を凌駕する品質の人工ジュエリーが市場に溢れている。
タンス預金に関しては、だいぶ以前に闇バイトで集めた若者を使って、資産家宅に押し入る強盗が社会問題になったが、或る老夫婦がタンス預金の紙幣全てに、自分たちの名前を印字したことによって一気に下火になった。
スタンプを押された紙幣は、老夫婦の承諾なしには流通できなくなった、色のないカネに色が付いたのである。

だから、そんなものには目もくれない。
狙うは廊下の一番奥、この屋の主人の書斎だ。
3D プリンターの普及で、殆どの工業製品は個人で製造できるようになった。
必要な製品をプリントアウトするプログラムも、ネット上でほぼ無料に近い値段で供給されているが、標準的なものに限られる。
この屋の主人は家庭用安定核原子炉メーカーの CEO だ、原子炉に関する様々な製造プログラムを、個人用のスタンドアロンストレージに保存している筈だ。
書斎のドアを開け、セキュリティーが作動しないのを確認して、奥のクローゼットに向かう、暗闇の中で無数の LED が明滅している。
ストレージドライブをそのまま持ち帰るのがクライアントからのオーダーだ、荷物は嵩むが大した重さではない。
ラックの上のストレージドライブに手をかけたその時だった！
何かがこっちを見ている———ストレージを両腕に抱え上げたまま、立ち竦んだ。
まるで周りの空気そのものが、こっちを凝視しているようだった。

そのまま書斎を後にして侵入した浴室のトップライトに向かう。
長い廊下の端から浴室のドアを見てぎょっとした、掃除ロボットがドアの前で静止して天井を見上げている、今にも警報を発報しそうな様子だ。
廊下に沿って並べられた観葉植物の大鉢から玉石をひとつ掴む、大きく振りかぶって放った。
掃除ロボットのセンサー部が弾け飛んで動かなくなった。
トップライトから抜け出て、外周の塀を伝い敷地裏の一角から道路に飛び降りる、黒塗りの高級車が一台、ドアを開けて待っている。
リアのシートに飛び込んだ刹那、天井のモニターに以下のテキストが英字で表示された。

“よくやったジョン・クアリ、報酬は内閣官房から警察庁を経由して振り込まれる。政府の機密業務（闇バイト）は、上半期これで終わりだ。明日は何事も無かったように、広島県警に出勤して欲しい。”

黒木玲子と穴見愁子

「それで、ビデオレターの発信元は分かったの？」
穴見女医の大学病院研究室である。
例によってお気に入りのロッキングチェアに深々と身を委ね、電子タバコの長いパイプをふかしている。
「海外の複数のサイトを経由しているみたいで、発信元を突き止めるには時間がかかると思います。」
入り口近くのソファから玲子が答えた。
「奥寺君大変だったんじゃないの？ 10 m超える怪獣でしょ。」
「SRI 総動員で解体に丸 3 日かかったようです。それより先生、さっきの質問ですが・・・。」
「ビデオレターで “沖田総司” が心配していた件？」
「“システム C” の六角虫は、人の体内で猛毒のたんぱく質を生成できるんでしょうか？」
「イエスかノーかと問われれば、答えはイエスね。但しそれが人の生存を脅かすかどうかは、六角虫を体内に取り込んだ状況と、生成するたんぱく質の種類によるわ。」
「———といいますと？」
「六角虫は機械だから、人の体内でそれ自体増殖することはないわ、外部から取り込まれた総数はずっと変わらない。奥寺君の話だと六角虫が一つのたんぱく質を生成するのにかなりの工程を要するじゃない？ 総数が限られた中で一斉に同じたんぱく質を生成したとしてもその量はたかが知れている、毒素としての毒性を発揮する前に、分解されて体外に排出されるのが殆どだと思う。」
「でも？」
「———でもね、体内に取り込んだ六角虫の総数が異常に多ければ、あるいは極微量でも毒性を発揮するたんぱく質なら・・・。」
「例えば？」
「ボツリヌストキシン、テタノスパスミン、シガトキシン、テトロドトキシンといったあたりね、何れも生物兵器開発の前歴があるわ。」
「生物兵器ですか・・・。」

急に窓の外が暗くなり、古い研究棟のガラス窓を大粒の雨が叩き始めた。
シトシト降り続く春雨の穏やかさは、今の日本に望むべくもない。

「でも “システム C” を含む六角虫と、鮫の怪獣とは関係ないんじゃないの？」
「どうしてですか？」

「六角虫は、無数の単純な個体を結合させた集合体として機能する。鮫の怪獣は、一個体に複雑な専用パーツを実装し、それを統括して機能している。同じ目的を達成する為の機械だとしても、“ポーン” で勝負するのか “キング” を使うのか、チェスで云うならそれ程の違いがあるわ。」
「そうですわね、六角虫に関しては既に故人ですけど、小野寺亘と小倉圭三という首謀者がはっきりしてる。鮫に関してはまだ全く分かりません・・・。」
「京都と伊勢の事件との関連を、考えるべきよね。」
「———やっぱり、そう思いますか？」

ロッキングチェアから腰を上げると、ギャレイ端のウォーターサーバーにグラスをふたつセットして、「今日は一日オフなんでしょ、ゆっくりしていってね。オレンジフレーバーの炭酸水だけど・・・飲む？」
水滴のついたグラス越しに玲子の顔をまじまじと見詰めながら、「いい歳になったわね、彼方此方小皺こしらえて・・・艶っぽいったらありゃしない。」
「まだ、私を抱きたいですか？」
「お婆ちゃん同士で何言ってんの・・・。」
そう言いながら、肩に手を回す。
「どうしたの？ いつもの煩いあの娘・・・。」
「東京の本庁で、一週間研修です・・・。」
口に含んだ炭酸水には、甘酸っぱいフレーバーの背後に、喉の奥を熱くする強い刺激があった。
ウオッカベースのカクテルだった。

奥寺　淳

東側の窓台から続く、長い棚に並べられた無数のサボテンの小鉢、ミニサボテンである。
古いものは育て始めてかれこれ 3 年、これといった趣味の無い独り身にとって、其々の鉢に深い想い入れがある。
但しその姿かたちには、一向に変化がない。
3 年間全く同じ大きさ、同じ姿のサボテンである。
周りを囲う空気をも含めて、時が止まっているかのようだ。
彼らには、時間という概念があるのだろうか、あるいは我々人間とは別の時間を生きているのか？

久し振りの完全オフ。
穏やかな陽光の下で、棚の上のサボテンを観ながら、鳥の巣の頭でぼそぼそ考える。
窓下の歩道を、黄色い帽子の園児たちが賑やかな声を上げながら通り過ぎる。
奥寺にとって滅多に体験し得ない、同時刻の日常だった。

時間は相対的なものだ、立場によって所属する時間が違う。
共通の時間は存在しないから、共通の過去も未来も現在も無い。
そんな事はないだろうと時々思う。
微細な世界では、物の状態は観測された瞬間に確定する、観測されない間はあらゆる可能性の重ね合わせの状態だ。
仮に今（現在）を、観測された瞬間だと考える。
未来はまだ確定していないから、まさに可能性の重ね合わせの状態であることに異論はないだろう。
ところで、過去も同様に可能性の重ね合わせの状態だと論じれば、“既に終わったことは確定している。人の記憶も、書物の記録も、メモリやストレージのデータも、確定した事実の履歴ではないか”　と反論される。
ここで留意すべきは、データを再生するのも、書物を読み返すのも、人が記憶を振り返るのも、今のこの一瞬以外にありえないことだ。
今のこの一瞬に、記憶も記録もデータも、初めて確定する。
未来や過去と同じように、確定するまでは記憶も記録もデータも、可能性の重ね合わせなのだ。

人は未来よりも過去に縛られる、過去の自分の行為や出来事に、自らを戒める。
法律は、過去の行為についてのみ人を裁く。
刑法の立て付けが、証言や証拠に立脚するのはこの為だ。
従って警察は、正確な証言や証拠を集めるために、あらゆる手段を使い、最先端の技術を駆使する。

杉から檜へ替りやっと下火になりつつあった先月、花粉の飛散に関して一部にほぼ同じ大きさの人工物が含まれる件を、県警を通じて本庁に報告した。
関与を禁止する命令が直ちに通知された。
警察庁がロボットに対して異常な関心を持ち続けるのは、一体何の為だろう。
花粉の人工物は、超微細カメラと通信ディバイスの周りを、球状の太陽電池で包む構成だった。
花粉ロボットが空気中を浮遊して、あらゆる空間に入り込み、そこで行われる行為を全て撮影すれば、空気そのものが監視カメラになるのだが・・・。

白河笑子

「———姉ぇ姉ぇ！ 姉ぇ姉ぇ！」
笑子の甲高い呼び声が、下町の路地に響き渡る。
振り返った小太りの女が満面の笑みを浮かべて両手を広げた。
「———えみぃじゃないか！」
走り寄ってしっかり抱き合う。
「何年振りかね？ えみぃ。どうしたのぅ今日は？」
「昨日まで本庁で研修だったの、今日は非番。久し振りの東京だから、姉ぇ姉ぇに会いに来た。」
“姉ぇ姉ぇ” と呼ばれた沖縄訛りの女性、齢は笑子より一回りほど上、小太りの割にがっしりした体躯に見える。
昼下がりの商店街、買い物客の視線を一向に気にもせず、路地を回り込んで裏へ出ると、見覚えのある古い軽トラの荷台に、長々と金属のパイプが括りつけられていた。
「まだ、物干竿売ってるの？」
「女ひとり何とか喰っていかないとねぇ、背に腹は代えられないよ。」
「一本いくらで売るの？」
「———2 万円さぁ、ステンレスの一本物だから、そんなに吹っ掛けてる積りはないよ。」
「団地に行って、声が掛かったら早速古い竿を回収するのさぁ、長さを測って大急ぎで新しい竿をカットする、値段を聞かれても適当にあしらって、カットし終わればこっちのもんさぁ、相手が買う積りかどうかは関係ないね。声を掛けて目の前で竿をカットさせた訳だから・・・。」
「法規ギリギリの商売よね、何も言われないの？」
「店で買えば確かにもっと安いだろうけど、4 mの一本物を自宅まで持ち帰るのが大変なんだ。値段に疎い素人が、そんなものかって、買ってくれるのさぁ。」

街並みが雑多で、統一されない下町の裏道を暫く走ると、「どうだい、いつものリングでひと汗かいてくか？」
そう言いながら古いビルの駐車場に軽トラを停めた。
外装のタイルの色も判別できない薄汚れた建物、最上階の窓のレスリングジムの表示が西日に輝やいている。
息を切らせて階段を登りきった先の、重いドアを開けた広間に、四角いリングが設えてあった。

「此処を維持するのもお金掛るからね。」
「―――ジムは今でも毎日？」
「週５日だけ、その内１日はボランティアのレスリング教室だから、実質４日間だけさぁ。オリンピックで日本が活躍してた頃は実入りも良かったのにねぇ・・・。さあっ、そこで着替えて出てきて。」

数分後、シングレット（レスリング・ウェア）に身を包んだ笑子と“姉ぇ姉ぇ”が、リングの上で向き合った。
上半身で組み合って、お互いに相手のバックを取りに行く、腕を締め上げて押し倒そうとするが、両脚を拡げ踏ん張って堪える。
姉ぇ姉ぇの太い腕が股に回って体を持ち上げ、堪らず仰向けに倒れこんだところを足を絡めて一回転、大きく開かれた笑子の股間が天井を向いて立ち上がった。
姉ぇ姉ぇ得意の固め技だ。
フォールを堪えて必死にもがく笑子の耳元で、優しく呟いた。
「あんたがパートナーに出会って結婚して、京都や広島で活躍してるのは、噂で知ってるよ。幸せなんだろうねぇ、体に張りがあっていきいきしてる、肌もしっとりと艶っぽいよ。今日はパートナーの代わりに私がしっぽり可愛がってあげる、昔のようにね。」
シングレットが大きくカットされた背中から、いつの間にか忍び込んだ右手の指が、ゆっくりと繁みの一番深い部分に侵入してきた。

秋山修平

交通機動隊宿舎の屋上である。
秋山修平は天気のいい休日、サマーベッドを持ち出してよく此処で過ごす。
サイドテーブルには、よく冷えたノンアルコールビール、骨伝導イヤホンからはオールディズジャズの懐かしいメロディーが・・・。
視線の先の国道高架では、数珠つなぎの車列が延々と続いていて・・・。

但し昔と違って渋滞はしない、車列は相応のスピードで整然と流れる。
近年の AI による運転支援の賜物である。
運転支援というより介入に近いものがある、出発前に目的地と経由地をカーナビに入力、ドライバーの運転操作には車として応答するが、交通密度の高い都市部等では AI の判断・操作が優先する設定となっている。
目的地や経由地には特に支障なく到着する、但しドライバーの気分に基づく行き当たりばったりの判断・操作は反映されない。
GPS と高度な相互通信技術によって実現されるシステムであり、高齢者ドライバーによる事故を劇的に減少させた。
最近では、交通密度の低い地域での運用も拡大して、煽り運転の撲滅に成果をあげている。
システムの高度化に伴い、車間距離の短縮や交差点信号の撤廃が議論されている。
やがて車も、人が自由に操れる機械ではなくなる。

車の電動化の大きな障壁となってきた、大容量バッテリーや急速充電インフラの問題も、解決に目途が付いてきた。
車が走行しながら集電する技術が、開発されたのだ。
タイヤをパンタグラフ代わりに、道路から集電する。
送電用のシートを道路の舗装面に貼り付けるだけだから、低予算で全国の高速道路、国道、主要地方道に一気に施設された。
タイヤのゴムを導体にする技術と、道路に貼り付ける送電シートが、タイヤ以外の人や動物、自転車等を感電させない技術が融合した。
これにより個別の車には、大容量バッテリーの搭載が必要なくなり、更に回生ブレーキで電力を融通しあえば、全体として思った程の大電力を要しないことも実証され、一般家庭の安定核原子炉から供給される余剰電力で、充分賄えることが判明した。
移動手段の社会インフラとして、完成度を高めている。

其のせいか、自家用航空機いわゆる空飛ぶ自動車が一向に普及しない。
エアロバイクで仕事する者としては、忸怩たる想いがあるが、やはり航空機の安全性に普及を拒む最大のボトルネックがあるようだ。
飛行中の機体に不具合があった場合、搭乗員の安全確保もさることながら、墜落する機体の確実な処理にどうにも目途が立たない。
自律制御のオートローテーションに期待しても、直撃する家屋や施設には確実に被害が生じる。
小型ロケットで高度を稼ぎ、安全な水面や空地に誘導するプランもあるが、建物が密集する都市部では確実性がない。
全ての航空機は、運用する空間にエンジンを停止した状態で、安全に静止出来ないという他の乗り物には無い特殊性を持つ。
その特殊性を改善しない限り、これ以上の普及もあり得ない。

ジャズの艶やかなメロディーの下、くだくだ考えていた意識が、ようやくうつらうつら遠のき始めた時、稼働中の骨伝導イヤホンから、怪我人の緊急搬送の指令が入る。
———緊急招集だ！
島根県境の山中で、土木作業員がクマに襲われたらしい。
交通機動隊の主要な任務も、地上交通の監視やパトロールから、人命救助、搬送といった本来なら消防が担うべき緊急業務が増えた。
制服への着替えもそこそこに、大急ぎでエアロバイクの駐機場に向かう。
———ちょっと待て！
猛獣との遭遇は避けたいが、最近装備を認められたショットガンにカートリッジを装填しておこう、———念のため！

*本作品はフィックションであり、実在の個人・団体等とは一切関係がありません、悪しからずご了承ください。
尚、表紙に使用しました写真は “Photo AC” 様より転載させて頂きました。*

悲喜交々のアンソロジー

著　　南海部　覚悟

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社